

# 沖縄エイサーの歴史と沖縄の文化 宜保榮治郎氏

岐阜女子大学

「沖縄おうらい」

## 目 次

1. はじめに
2. エイサーのルーツと袋中上人
3. 袋中上人の布教活動
4. 沖縄の芸能
5. 沖縄の音楽と琉球魂
6. 中国・韓国との交流
7. 沖縄の獅子舞
8. 文化財の保護について
9. 外国から伝わった言葉
10. 中国貿易とその影響
11. 三線と太鼓
12. 現在のエイサーについて

# 1. はじめに

## 聞き手 1

やはり沖縄のエイサーを抜いて、話ができないだろうということになりまして、そして、今のこの人たちもそうですけれども、お生まれになったところから、実際の今の「じゃんがら」という、向こうの念仏踊りですね。

## 宜保先生

向こうといいますと福島ですか。

## 聞き手 1

福島のいわき市の。それから、こちらの方のエイサーを見せていただいたり、仲本先生のおかげで見せていただきまして、最後に、今のところはここまで調べてきたわけでございます。京都で亡くなったと言われております。

## 宜保先生

檀王法林寺ですね。

## 聞き手 1

そうです。ここら辺のお墓も全部記録にとどめまして、こういうふうになってきておりますわけですけれども、ここで一つ行き当たりしましたのが、実際このエイサーというものが、どういう形で、本当に先生のご本を読みますと、やはり袋中上人とのご関係があるような、全体でない一部だと思えますけれども、やはりそこら辺のところがあると思えますもんですから、そこら辺のお話を少しお聞きしておいて、そして、できればそれを私ども、先生の方のお話の記録として、アメリカでは一つのオーラルヒストリーと言っていますけれども、要するにお話しになったのを歴史的に残していこうということで、とどめていこうと思えます。

それについて、こういうような映像を、先生がお話しになったのに対して、こういうふうなら、それだったらこのことかなということで、私の持つておる映像を合わせてみて、そして一つの体系化をしておこうかなと思っておるもんですから、ぜひ、今日、先生の方で、ご本を読みますと、割に先生ははっきりお書きになっておるようですけれども、琉球の国史の方から始まって、どういうふうに伝わってきたかということや、それから、いろんなご説があるようでございますけれども、そこら辺のことも多少含めながら、どんなふうにかこれといったのかということをお話し願えるとありがたいなと思えます。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) 1. はじめに

### 聞き手 1

それからもう1件、最後になりますけれども、できれば、沖縄というのは、私、中国の方ともいろんな調べをやっておるものですから、中国から来たときの、エイサーとちょっと離れまして、いろんな獅子舞とか、いろんな建築物もそうですけれども、向こうから来ておりますので、そこら辺のお話も少し最後にしていただくと、分けてしていただくとありがたいと思いますけれども、そんなことで、最初にエイサーの歴史というんですか、そんなことからお話し願えるとありがたいなと。私の方で適当に切りますものですから、ざっくばらんにお話しただけであればいいと思いますけれども、そういうことでお話ししていただければと思います。

## 2. エイサーのルーツと袋中上人

### 宜保先生

私は、このエイサーをやってもう40年ほどになりますけれども、結局沖縄も盆踊りですね、エイサーが沸騰するぐらい昔から盛んなんですね。ですけれども、このエイサーがどういう意味を持っているかとか、あるいは目的、そういうふうなものは盆行事としてふさわしくないような解釈があるわけですね。

このエイサーの目的というのは五穀豊穡のために踊られるんだというふうなことでやっておりまして、やっぱり庶民の言葉で言いますと、何でも五穀豊穡、子孫繁栄と言ってしまえばすべての目的はそれに集約されるわけですから、そういうことで、沖縄でもエイサーは五穀豊穡だということを言っているわけですが、けれども。

しかし、なぜ盆という仏教の行事のときにやるのかということがあまり研究されていなかったわけですね。そして、私は名護の出身ですが、非常に不思議に思いましたね。なぜお盆のときにエイサーというのがあるかということでもずうっと疑問に思っておりまして、まずは自分の周辺からの「エイサー」の言葉ですね、詞章、歌詞をずうっと拾い上げてみたら、たしか5~6ヶ所ぐらい拾い集めてみたら、共通する歌詞があるわけですね。これはもう「七月七夕中ぬ十日」という、この「仲順流れ」という曲があるわけですね。これがもうどこにでもあるわけですよ。

どうもこの部分だけは捨てられない部分ではないのかということで、結局、私は民俗学の方の専門ですから、民俗学の方でもトータルをとって見て、やっぱりみんな共通する部分があると、ここの方が一番大切な部分だということがわかりましたので、そして、踊りそのものは、庶民の踊りですから自分たちが踊りやすいようにどんどんつくっていくわけですね。

どうもこの歌詞が大切じゃないかということで、最初のレポートはそれを書いたわけですが、それ以後、沖縄の民俗芸能の、あるいは芸能全般についての、一番最初に本格的になされたのが山内盛彬という先生がおられましたね、この人は師範学校を出られて小学校教員をしているんですが、やっぱり音楽が好きで、おじいさんに王府時代のそういう音楽関係の仕事をした山内盛熹といいますけれども、その人が、沖縄の音楽は大切だから、もしかして首里自体は王府制度が消滅したんで衰えているんで、本物が田舎に残っているはずだから、おまえ調査しろと言われて、この人はもうずうっと我々の先輩ですが、交通が非常に不便なころ、歩いて、バスで行かれて、そして地方地方のそういう古謡というふうなものをずうっと調べておられたんですね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

## (続) 2. エイサーのルーツと袋中上人

### 宜保先生

そして、その人の著書の中には、私がずうっと追跡していったことが端的に書かれているわけですね。しかし私は、まだこの学者の共通知識といいますか、それになっていないわけですね。それで、私は、これはやっぱりきちっとそういうところを学問で研究して、県民全部に知らせなくちゃいかんということで、まずたびたびレポートを書くんですけども、何分若いときは、学者の端くれ、全く誰からも眼中に置かれないわけですね。

そうしている間に、沖縄の文献をずうっと調べてみると、袋中上人が1603年ですか、沖縄に来られて浄土宗を広められたと。そして、今度行かれた方がいいと思いますが、桂林寺跡というのが商業高校の裏側の方にありまして、この袋中上人が沖縄に来られて浄土宗を広められたと。そして、そのときにお経を庶民にわかりやすく沖縄の言葉に訳して教えたということが、はっきり『球陽』という本とか『琉球国由来記』という本に出ているんですね。

そういうことがはっきりしているのに、まだ盆踊りというものは本当に袋中上人が持ってきたかどうかわからないというふうになっていたんですね。そして、お盆の季節になると、新聞が、各村々でエイサーが行われていると、それは全部五穀豊穡を目的とした行事であるというふうなことを言っていたんですね。そういうことでやりましたら、外間守善先生が、本土の方の第一書房だったかどこかと提携しまして、その沖縄の歌を全部拾い集めると、これまでのものを。

そういうことがありましたから、私は、じゃあこのエイサーのもと歌がどこかに残っていないかということで、ここの南部島尻あたりに調査し始めたんですね。これが見事な形で残っているんですよ。そして、私は、この一つの村を採集するのに2日も3日もかかりますから、それをずうっと追跡して行って、私は5つばかりですかなあ、「仲順流れ」の歌をずうっと集めていったんですね。そしてそれを外間先生の方に送りましたら、先生もびっくりしておられたんですね。

## (続) 2. エイサーのルーツと袋中上人

### 宜保先生

というのは、外間先生自身が、もうすべて沖縄の歌謡のものは『おもろさうし』であるというふうに思い込んでおられるんですね。そして、今度は先生が、エイサーはおもろから発生してきたんだとおっしゃるのは、「エイサーおもろ」というのがおもろの中にありましてね、そして先生は、この「エイサーおもろ」からエイサーは発展してきたんだという説をずっと持っておられますけれども、私は、そうじゃなくて、こういうふうに「盂蘭盆経」という中国のお経が日本に渡ってきて、そしてそれが浄土宗のお坊さんの方で勉強なされて、袋中上人は沖縄に来られて、お盆のときにこういう芸能をやりなさいと。

そして、そのときに、親の供養は大切であると、あるいは亡くなった人の供養は大切であるということ、この「仲順流れ」というお経で教えられたというふうにして話しましたら、次第に近ごろは新聞の方も、エイサーは念仏踊りであると、そしてお盆の目的は供養であるというふうなことで、ようやく私が説明したことがあるわけですね。だから、私が第一発見者というわけじゃないんですね。山内盛彬という大正のころの有名な沖縄の学者、あの方がもう触れておられました。

もう一つは、八重山にアンガマという盆の行事がありましたね。そして、八重山は八重山なりに芸能が発達してやるわけですが、歌詞を調べますとそっくり同じなんですよ。それで私は、沖縄の南島史学会という最初の大きな行事があります。そこで、八重山のアンガマと沖縄のエイサーは同じであるというふうなことを言ったら、みんなびっくりしましてね。表現のやり方が少し違うもんですから、けども根は一緒だと。そして、その八重山のアンガマの言葉も沖縄から向こうに渡ったもので、そういうことをやっているわけですね。

そしたら今度は、近年になって那覇市の国場というところから、うちの方にも念仏踊りがあるから見てくれというもんですから行ってみたら、全く先ほどの、沖縄のエイサーで今華やかなのがありますね。あれとは全く違った素朴なエイサーを踊っているもんですから、ますます山内盛彬先生と私が主張したことが証明されたということなんですね。現在そういう形です。

### 3. 袋中上人の布教活動

#### 聞き手 1

先ほどおっしゃいました商業高校(裏側)の桂林寺、私もあそこへ行きまして、なかなか、先生、わからないんですよ、あそこね、中へ入り組んでいるもんですから。

#### 宜保先生

端っこの方、もうちょっと中の方ですね。

#### 聞き手 1

見つけるのにちょっと難儀しましたけれども、あそこを見まして、これは確かに先生がおっしゃっておるあれ(場面)と一致するなあということ。あれは、どなたかがずっと守りしておられるわけでしょうか。

#### 宜保先生

久米あたりの人たちが、久米町といって華僑のまちがありまして、ここの人たちが割合ある程度管理しているわけですね。

#### 聞き手 1

ああ、華僑の方たちがですか。

#### 宜保先生

華僑ですね。華僑で、今から5~600年ぐらい前に沖縄に移住した人たちで、本人たちは華僑とも何とも言わずに、もう中国語も全然しゃべれないで、沖縄の人になっているわけですけども、しかし、はっきりと自分たちは福建省から来て、福建省にも自分たちの同族がいるということははっきりしていますからね。その人たちが割合あそこを管理しているんじゃないですかね。

#### 聞き手 1

そうしますと、あそこが一つの起点になってきて、一時的にはお広げになったという形になるわけですね。もう一つ、こちらの方にお寺さんがありますね。

#### 宜保先生

袋中寺。

#### 聞き手 1

はい、あそこへもお邪魔したんですけれども、あそこはどのような関係でしょうかね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

### (続) 3. 袋中上人の布教活動

#### 宜保先生

そうですね、詳しくはわかりませんが、ただ、今の那覇は、沖縄本島がこうありますと、離れ島なんですよ、昔は。そして、ここの間を浅瀬を利用してこういうふうにしたわけですね。そして、現在の那覇市というのはこれを全部埋めてしまって、昔の那覇市というのはこういうふうで、今の袋中寺はこちらの方にありまして、こうなっているわけですね。そうすると、桂林寺がここにありますが、このあたり全体が袋中上人の布教の場所だったというふうに感じられますね。

そしてもう一つは、この袋中上人が徳が高いもんですから、わずか3年の間に琉球王がこの人に非常に帰依しまして、もう先生を非常に大切にするとということで、沖縄のいわゆる豪族の一人で儀間眞常というのがいまして、この人がここに住んでおられるわけなんです。儀間眞常に先生を大切にしろというふうにはっきり指示なさせて、それで儀間眞常は、今で言うと商工大臣みたいな人だったんでしょうね。

それでこの人が桂林寺を王様のあれによってつくって、このあたり全部念仏宗のあれですね。やっぱりまだ学者たちもそう思っているんですが、その尻のここの方に、遊芸人の、安仁屋村といって、いわゆる人形操り、傀儡子の集団がおりまして、この連中がエイサーを吸収して島中に広げているもんですから、もうみんな、エイサーを広めたのは傀儡子だと言いますけれども、実は違うんですよ。

結局、この桂林寺の方、このあたりにしっかり根づいていましてね、そしてこれを、ここのエイサーを傀儡子たちは自分の芸として吸収して演じていたわけで、この人たちが広めた事実はなかなかないです。

#### 聞き手 1

ああ、そうですか。儀間眞常さんというのは、ある意味では非常に大きな働きをされた、この念仏踊りとしてのこともさることながら。

#### 宜保先生

この人は、産業のものすごい普及者で、沖縄の砂糖の製造法をしっかり整理した人なんですね。それから、芋なんかも広げるのに大変功績のあったような人ですから、そういうことで、この人がこの袋中上人を守り立てて、一種の庇護でしょうね、バックアップして、世話をしていたんでしょうね。

### (続) 3. 袋中上人の布教活動

#### 聞き手 1

そうするとやっぱり、今の王様、王府の方と儀間眞常さんというのを一つのバックボーンにした形で、そこに袋中上人が位置づけられているという、それが基本にお広げになったという形で。今のいろんな中には、今現在、見させていただいてもいろんな踊りが入っていますね。以外のいろんなものが入っていますけれども、そういうものはやっぱり副産物的な形で。

## 4. 沖縄の芸能

### 宜保先生

芸能というのは、もういわゆる浮気なもので、どんどん変化していくところに芸能の発達といいますか、それがありますから、私たちは、最初はエイサーをやっている人たちの服装とかそんなものに幻惑されて本体がつかめなかったわけですけども、やっぱり歌詞とか曲というものがなかなか変わらないわけですね。それをずうっと追求していきますとわかりますのでね。だから、今のこの太鼓でやっているのは、非常に変化していったものですよ、ものすごく

### 聞き手1

そうすると、最初は、やっぱり、詩やなしに踊りの方へ行きますと、これがちょうど今じゃんがら念仏ですね。

### 宜保先生

これは沖縄物ですね。

### 聞き手1

はい、沖縄ですね。非常によく似たものがあるんですね、基本的には、ものによってはですね。

### 宜保先生

両方をしっかり比較してみたらいいと思う。まだそこまでいっていませんでね。

### 聞き手1

向こうを私もずうっと見させていただいたんですけども、こちらを見せていただいても、非常によく似た踊りのところ、場所ですか、こちらの方でも、踊り方がですね。

### 宜保先生

あまり似てないと思いますよ。もう400年も離れますと、もう全く似ても似つかないものであると思いますけれども、そのじゃんがらの場合も、最後に念仏で「南無阿弥陀仏」がありますね。沖縄の場合も、大体「南無阿弥陀仏」という詞章が残っているのが結構あるんですよ。そういう形であって、両方がすぐ、比較してここが似ているとかなんとかいうのをちょっと。

## (続) 4. 沖縄の芸能

### 聞き手 1

そういうことではないわけですね。ただ、そうすると、袋中上人が持ってこられた一番大きなものは、一つの考え方とか思想とかですね、今の仏教的な。

### 宜保先生

ですから、今私が言います「仲順流れ」というあれが、メロディーは昔からのものですよ。そして、その中に袋中上人が、先ほど言いました「盂蘭盆経」の思想がたくさん入っているわけです。この沖縄の念仏踊りも、恐らく10種類ぐらいに分かれるんじゃないかと思えますね。継親に虐待されたのが、地獄に落ちているお母さんを救い出して供養するとか、いろいろのパターンがありまして。ですから、まだそれ、しっかり調査はやられていないんですよ。私も、やったらものすごい業績になるなあと考えておりますけどね、なかなか。

### 聞き手 1

大変ですよ、それは。

### 宜保先生

もういろいろ、沖縄の場合はその全体像がわからなかったんですよ、どこにどんな芸能があるかというのは。ただ、あちこちで芸能が盛んだということだったんで。

沖縄のそういう芸能のある程度の概要がわかったのは、早稲田大学の本田安次先生が昭和32~3年ごろに沖縄に来られて、しかも、大浜信泉という早稲田大学の総長がおられましたから、この人が、沖縄の芸能というのを、君、一つやってくれということで、2回ですか助成金をもらってですね。本田先生という方は大変執念のある方で、あの身体で沖縄中を真夏にずうっとこうしてごらんになっているんですよ、2回とも。

ですから、あの人がある程度、八重山にはこういう芸能がある、宮古にはこういう芸能がある、沖縄にはこういう芸能があるということを、ほぼ概要が、今で言いますと7割ぐらいわかりましたですね。その後、また沖縄に文化財に新城徳祐という先生がおりまして、この人は研究者というよりは普通の物知りだったんですけども、この人がまた珍しい芸能だけをピックアップして育成していったんですね。

そしてその後、三隅治雄先生が今度は本田先生の後から沖縄の芸能を調査なさせて。そのころまではやっぱり8割ぐらいですかね。その後、東間一郎と私と、大城学君と3名で、ほぼ今9割ぐらいは仕上がっているんじゃないかと思えます。だから、今は非常に我々がわからない芸能というのはまず少ないです。

(続) 4. 沖縄の芸能

聞き手 1

それはやっぱり本田安次さんの、私、ご本も 15 巻ありますからね、全集がありますね。あれも見させていただいたんですけど。

宜保先生

『南島探訪記』というのが、一番そのときのあれですね。私たちも舌を巻いたんですけどね。

聞き手 1

たしか、あれは昭和 30 年代でしょうかね。

宜保先生

はいはい、そうですね、1 回来られて。

聞き手 1

立派な仕事をやられたんですけど、ああそうですか。

宜保先生

ですから、沖縄全体の面積とか距離からいいますと、青森から鹿児島に近いわけですから、その島々でみんなは違うものですからね、我々は全部こうして一人ひとりマークして見るのも。結局私なんか 40 年ぐらいかかったわけですね。

聞き手 1

大した仕事でしたね。

宜保先生

それで、今はもう、ようやく東間も私も大城君も、また今度は、じゃあ沖縄の芸能はこういうふうなものだけれども、これはどこと影響があるのかと。沖縄というのはそんなに文化を生産できるところじゃないですからね、貧しい国ですから。

## 5. 沖縄の音楽と琉球魂

### 聞き手1

そうですけどね、ここくらい音楽的な感覚のいいところはないと思うんですけどね。

### 宜保先生

それは全部中国から伝播したもの、韓国から伝播したもの、大和の方から伝播したものを充用して、それを見事に自分たちのものにしたわけであって、こんなジャングルに覆われた島では、文明とか文化というのはなかなかオリジナルなものは出てこないですよ。ですから、我々は沖縄にある芸能とか文化を、これはどこの影響かということですうっとやっているんですね。だって、大和だってそうじゃないですか。仏教だって、何でも全部朝鮮半島とか中国から入ってきて、自分たちで創造し、新しく発展させているじゃないですか。

### 聞き手1

でも、音の感覚というのは、沖縄の方というのは非常にいいような気がするんですけども。それで今の有形に広がったのかなという気がするんですけどね。

### 宜保先生

だから、最初からあったわけじゃなくて、それを重要視している間にそういう好みの方がずうっと拡大していったんじゃないんですか。異常なほどありますね、本土から比べますと。歌と踊りがないと何も始まりませんから。ですから、官僚のように文化のわからない人たちが非常に嫌うんですよ。もうコマーシャルでもそうでしょう。

いつでも沖縄では酒が出て、泡盛の宣伝をして、それから次に踊りを踊って終わると。だから、働いている姿は全くコマーシャルに出ませんもん。だからもう沖縄の人は、何かあるとすぐ酒を飲んで、踊りを踊って、昼寝をして終わっていると思うんですが、実際はそんな生活はないわけですよ。ただし、やっぱり特質なんですよ、沖縄の。

### 聞き手1

こういう方面でおつき合いじゃなしに、いろんなことでおつき合いが長いんですけども、まず宴会の始まる前にもうお酒が出ますからね。これはまた、ちょうど宴会の前のお茶と同じ。そうすると、もう正式の話が始まるころは大分レベルが上がってしまっておるわけです。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

宜保先生

ですから今、大和の力が、東京の力が強いもんですから、もう役人を通してどんどん、いわゆる儀式みたいなものが、やっぱり東京方式でやってきて、そしてセレモニーというのは、スピーチとか何とか全部やって、それが済んだら、じゃあ酒を飲もうというんですけれども、沖縄の場合はすぐ酒と儀式がごっちゃになっていますから。

そういうことで、結局、文化の衝突があるんですね。それから、近ごろはまた生活がよくなったもんだから、ああいうふうに東京の人たちのペースで自分たちの文化が全部変化していくとけしからんから、独立して、沖縄は沖縄のやり方があるんだということを言い出しましてね。だから、極左の連中はもう独立以外はないと、そういうふうな論調になりますね。

聞き手1

今の先生のお話を聞いておって、高知でもそうかなあと思うんですね。あそこも昔の高知魂ですかね、土佐というんですかね。今おっしゃったように、最初にお酒が出てしまうということはちょっと考えられないんですけど。

宜保先生

沖縄の場合もっと大変なのは、僕らの母語といいますか、いわゆる両親たちが使っていた、我々が小さいころ使っていた言葉が完全になくなりますからね。これをなくしてしまうと完全に魂がなくなるんでしょうね。そして、大和魂になるんでしょうね、琉球魂が。

## 6. 中国・韓国との交流

### 聞き手1

先ほど先生がおっしゃっておった中国との交流というのは、ここはものすごく多うございましたから、ところが、このちょっと向こうに平泉ってありますね。あそこには中国から渡ってきた踊りがたくさんあるんですね。先生はご存じだと思いますけれども、延年の舞というのがありますね。岐阜の長滝と白山ですね、白山と、あそこはもう残っていませんけれども、そこにはやはり中国から来た舞が歴然と残っているんですね。この前も見せていただいて、全然私にもわからない言葉があるんですね。話を聞いておりますと、それは物を言っている人たちもわからないと。それは何かといいますと。

### 宜保先生

中国語ですか。

### 聞き手1

中国語でもないというんですね。かつてお坊さんが中国大陸へ渡りまして、そして向こうの炉端といいましたけど、炉端で踊っている子供の踊りを、中国へ行ったお坊さんがそのままこちらへ来て、それを踊らせたというんですね。平安前後だと思えますけども。そのままずっと残ってきている。誰も、インドでもないし、どこの言葉かわからないというんですけどね、それがそのまま歌われておるといふ。

### 宜保先生

沖縄も、私たちが復帰の前後まで、打花鼓（ターファーク）という芸能がありますけれども、やっぱり中国のやり方で、辮髪をしてやるんですがね、これがわけのわからない歌をずうっとやるんですよ。そしたら、今から20年ほど前から中国福建省とのつながりが出てきまして、福建省の王耀華という先生をお呼びして、向こうも沖縄の芸能を調べたいということでやったら、沖縄には中国の芸能が記録化されているのがたくさんあるんですよ、歌詞が。

それがあるもんだから先生にお願いしたら、これは自分の福建省のここあたりで踊られているとおっしゃいましたね。そして、先ほど言いました、「うちはなつづみ(打花鼓)」と書くあれです、これももともとこの華僑の踊りなんですよ。それが中城のどこだったかな、あそこに残っているんですけども。これをやったら、先生がこれはもう自分がわかるということで、意味のわからない言葉を先生がずうっと整理なさって、そして整理なされたものをまた中国に残っているかということいろいろやっていますが、結構よくなっていますね。だから国際的に交流があればいいんですよ。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

宜保先生

ただ、私は、文化の方から言いますと、もちろん中国の方が一番大きいわけですが、一時期は韓国をモデルにしていた時期があるんじゃないかと思います。例えば、位牌とかそういう継承のやり方なんか、どうも韓国をモデルにしていることとか、あるいは闘牛とか綱引きとかそういうふうなものを、どうも今から5~600年ほど前は、琉球は中国へ行くよりも韓国の方との交流が非常に深かったと思いますね。

そして、それはまた沖縄のバイブルみたいな、憲法みたいなものに三韓の衆を集めとって、この三韓ですね、馬韓、辰韓、あのあたりの三韓のすぐれた文化を沖縄は倣ったということがあるんですがね。どうも歴史学者はみんな中国ばかり見ていますよ。今度は私は、近ごろ全くだれもが手をつけなかった民俗芸能をやっていますと、薩摩の影響も大きいんですよ。これは薩摩が沖縄を支配してからですね。

支配するためにこういうことをやらなくちゃいかんということで、今、薩摩の方にこれで2回行っていきますけれども、下野先生と資料を交換しながらやっていますがね。今のエイサーのように、沖縄で一番盛んな民俗芸能が薩摩から来たというふうなことで今やりたいと思っていますけどね。一種の醍醐味がありますよ。

聞き手1

そうですね。そうすると、やっぱり沖縄もそうですけれども、九州の宮崎県あたりでも韓国の影響がすごく強いんですかね。私も、あそこら辺に村所というところがありますけど、そこにずっと今でも獅子舞とかそういうものが残っておるんですけども、それを見ておりますと、これ韓国の影響が強いのかなという。そして、ある面ではまた中国の影響も強い、あるのかなという。

宜保先生

ですから沖縄の場合も、中国から来たものと韓国から来たものは、中国の研究もし、韓国も研究もしないと、一方的に中国からだけじゃなくて、我々は今後は、沖縄にある芸能をしっかり掌握した上で中国と韓国と大和の方、台湾から来ているのもありますね。

## 7. 沖縄の獅子舞

### 聞き手1

それで、ちょっと先生、外から来たということでお聞きしますけれども、この前、普天間宮の獅子舞を見させていただいたんですね。あの獅子舞というのは、中国のとよく似ておるんですね。ああいうものはやっぱり向こうから来たものなんですかね。

### 宜保先生

そうですね。獅子舞の衣装なんかを見ますと、韓国とは違うんですよ。韓国の獅子舞というのはざっとしたもので、はりぼての簡単なものですよね。けども、沖縄の獅子舞も中国の方も、きっちりつくっていくんですね。私が沖縄の獅子舞は中国から来たんじゃないかと思ったのは、「文芸春秋」に東南アジアの華僑のまちの祭りが出ていまして、そのときに獅子が2~3頭連れ立ってまちを歩いているんですよ。これが沖縄とそっくりなもんですから、これは間違いなく沖縄の獅子は中国系統だなあとはいまして、その後、また韓国のもを見ますと、韓国のもは、獅子の面なんかいろいろ考えますと、どうも独自のあれをやったか、向こうも中国から来たんでしょけども、そんなに発達していないんですね、沖縄のようにね。

### 聞き手1

沖縄の獅子舞というのは非常に興味があるんですけどね、おもしろいなと思って。ああいう毛が生えたような感じがしましてね。

### 宜保先生

非常にリアルに近くなりますからね。

### 聞き手1

あれはよそではちょっと見られん、特に韓国とかあっちの方では見られない。

### 宜保先生

そうですね、2人で入る形で。本土の場合も大昔、最初のころはそういうふさふさとした毛だったんですけど、いつの間にかあれは布に変わったんでしょかね。

### 聞き手1

そうですね。あれが寂しいと思いますね。

### 宜保先生

しかし、本土のまた芸能人は、抽象化して非常にすばらしいということを言っていますよ。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

## (続) 7. 沖縄の獅子舞

### 聞き手 1

我々は見えておりますと、いやあ、すごいなあという気が。

### 宜保先生

だから、大和のものはもっと古い時代に中国、韓国の影響を受けたもので、独自に発達したんでしょうね。だから、こちらから来たものと、朝鮮から来たものと、大和から来たもの、タイは南方から来たものを実態調査をしながら、こうして。そしてもう一つは、やっぱり沖縄独自に生み出された祭りとか芸能が、またこれがそうかしらんというふうにして、いろいろ分析してみたいという感じがしますけどね。

### 聞き手 1

しかし獅子舞は、やはりあの形で残していただかないと。ただ、時々見えておりますと、ここの空港でも獅子舞をやっておりますけど、もう少し原形に近いものやってあげるといいかなと。

## 8. 文化財の保護について

### 宜保先生

これはまた、本土の民俗学とか芸能の研究者も考え方が違いまして、古いものを残す努力は何もしなくたっていいんだと。芸能というのは移り変わっていくんだから、そういうことを言うんですが、私はやっぱりオリジナルなもの、原形に近いものも大切に保存しながら、また発展していくものは発展させていくというふうにしないと、僕らの同僚の中でも、化石みたいに残す必要は何もないという人もいますからね。まあ一つの考え方の違いでしょうなあ。

### 聞き手1

違いでしょうね。そうでしょうね、それはありますね。

### 宜保先生

文化庁の文化財保護の専門家もそういう人がいますよ。だから、古いものをいじくるんじゃなくて、やりたければ新しいのをつくれればいいんだと。

### 聞き手1

それはまた一つの考え方ですよ。考え方だけでも、それは文化の創造面での話ですし、しかし、その土壌にというか基本には、やっぱり、古いものをきちっと脈々と保存しておかないと。

### 宜保先生

じゃあ、あんた方は法隆寺というものも、あったというだけで、その法隆寺の跡に大きなコンクリートのうちを建てるかという、そこまでは言いませんけど。芸能は、何も古いものを化石みたいに残す努力は全く必要はないとはっきり言いますからね、文化財保護行政をしている連中がですよ。

### 聞き手1

私の方の大学では、今度は現代GPという形で、デジタル・アーキビストという形で指定されたんですけども、こういう文化情報のこれを保存していけという。それは基本的には文科省から指定は、この基本的なものを残していこうという。

### 宜保先生

そうですね、文化財保護行政というのはそれですし、また、それでやったためにものすごい価値を見出されているのがたくさんありますからね。

## (続) 8. 文化財の保護について

### 聞き手 1

それは、先生、サイエンスの中でも、今のDNAなんていうのは本当は歴史ですかね、あれ。まさに何が残っておるかということですから、育種の種の問題もそうですから。種でもかけ合わせて新しいものをつくるんですけど、もとながなかったらできないはずですからね。

### 宜保先生

原種ですね。

### 聞き手 1

そういう点ではやっぱり基本というものを押さえておかないといけないだろうと思います。それを私ども、どう残すかということが、映像にして残していくかというのは私の方の一つの、そういう人材をつくれということで指示を受けたんですがね。それで、今日はこういうことにご迷惑かけてきたんですけど。やっぱり、新しいものをつくるのは新しい分野でできますけれども、基本的なものをどう残すのかということは、これは。

### 宜保先生

そうですね。もうポルポドとかああいうものも、あそこにちゃんと残っているからこそ価値があるわけで、あれはあったという記録に残して、あとはあそこに市民のアパートなんかつくったって、そういう極論のような考え方にしておけるんですよ。

だから、この連中が仕事するところなことをしないですわ。うちの国立劇場も組み踊りの王府時代の舞台をつくれということけれども、絶対聞かないですよ。そして多目的なホールにしてしまいましたね。最初はそういう能楽のような舞台をつくらうと言うんだけど、そういう感覚の人がいましてね、文化財保護行政に。何もそこにこだわる必要はないと言い出して。ですから、何かいろいろありますね。

### 聞き手 1

これは余談になりますけれども、国立劇場の舞台監督がうちに来ておってくれるんです。持田というんですけども、それがうちの大学へ来まして、今やっておっていただくのは、能舞台の舞台の台をつくることから教えよと。そうすると、先生ご存じのように、あれは箱を幾つか並べましてね、その上にきちっとした板を打ちまして、そして木と木の間には、ちょうつがいのような、チョウチョウのような形をしたような、これをたたき込みまして、板をぐっと締めるんですね。

そして、舞台の上でぽんと足をけりますと下の箱が太鼓みたいに鳴るんですよ。そうするとポーンと響く音が出てくるんですよ。あの仕事というのは、私見ておりまして、今の劇場のようなものでやりましたらあの音は出ないんじゃないかなあと。

## 9. 外国から伝わった言葉

### 宜保先生

ああ、そうですか。沖縄に、この仮設舞台をつくる、できたものをバンクと言うんですよ。このバンクというのはポルトガル語なんですよ。どうしてできたかという、ポルトガル語が長崎あたりに入って、このベンチのことをバンクと言うんだそうですね。ベンチとバンクは同じ語源なんですよ。あとは私は受け売りですけども。そしたら、そのベンチをたくさん集めて、そして沖縄では例えばこんなのを4つ集めて舞台にするわけですね。だからバンクと言うんですよ、今でも。

### 聞き手1

全く同じやり方ですね。

### 宜保先生

同じやり方です。沖縄の場合はもっとおもしろいんですよ。各家の臼を集めて、臼って大体3尺の高さですから、それを集めてその上に板を置くんですね。板を置いて、あとは釘で締めるわけです。けれども、非常に危なっかしいものですが、崩れることはなかなかないんですよ。これはもう伝統的に首里王府のときはバンクと言うもんですから、どうもこれはバタ臭い名前だが何だろうということで、我々、問題にしていまして、大城学君が国語辞典で調べたら、「バンク」と書いて「ベンチ」と書いてあるもんだから、おい、なるほどそういうことだなあ。

今はわかっていますよ、先生がおっしゃるように、もともと箱だったんですよ。そして、これが薩摩でも言葉が出てきますから、それでこれが沖縄に来て、だからこの音の響きは随分きれいですよ。ぴしゃっと、こう頑丈なのでやるよりはですね。

### 聞き手1

国立劇場の職人がそれをつくってくれたんですけどね。そうすると、そのやる都度、箱を組み立てなきゃならんようになりますもんですから、大変な(のです)。そうすると、京都なんかから来ました研究者が、喜んでそれを見ておりましたがね。なるほどなあと思わしてね。こっちでバンクと言うんですか。全く同じような系統のものですね。

### 宜保先生

これは九州に広がっているそういうベンチで、銀行のバンクもあれから来たというんですよ。銀行の例でちょうどそれはすぐわかります。フランスとかあのあたりで、違うお金を交換する商人たちがベンチに座って、フランス語でこうこうやって、ベンチで仕事をしているのがそのままバンクになったと言っていますね。

もう銀行の例、ちょうどまた歴史はずうっとここで結びついてくるんですよ。銀行の連中に言うと、僕らでは常識だよ。銀行というのはベンチから発達してきたんだと、お金を交換して、座ってね。ベンチに行くと、向こうでお金を交換してくれると。

## (続) 9. 外国から伝わった言葉

### 聞き手 1

我々はそういう発想はないですからね。

### 宜保先生

ちょっと話があれしますが、沖縄に、昔から使っている英語が入っているんですよ。例えば恩納村の名嘉真という村がありますが、向こうの人たちは戦前から、「おい、もうお昼済んだからスタンバイしよう」というふうに言うんだそうですね。本人たちは昔から使っているものだから、方言だと思ったんですよ、自分たちの言葉と。

そしたら、米軍が、「おーい、スタンバイ」と言うものだから、また海軍の連中も、海軍へ行ったらスタンバイと言うんだそうですね。これスタンバイといって、恩納村の名嘉真の言葉と思ったが、どうも変だぞといってやったら、結局、伝承としては、恩納村にペリーの連中が、ペリーはすぐ近くのアメクの崇元寺というところで宿泊しましてね、病人なんかを。そこから今度は沖縄全体を将来占領するつもりで測量しているんですよ。

恩納村の名嘉真に泊まって、そこからまたやって、そのときに「スタンバイ」という言葉が入ったんだろうと。そうでないとわからないということですね。それから、ペリーの連中が金武村の宜野座というところへ行って、沖の方に岩礁がありまして、宜野座ではこれをエゴイワと言うんですよ。そして聞いてみたら、ペリーの記録に、たくさんの海鳥がそこに卵を産んでいるから、あれはエッグ岩と書いてあるんですね。

そしたら、もうみんなは普通はエゴイワ、エゴイワと言うけど、年寄りが、ばか、あれは本当は大きな石、オフジと言うんだよと。エゴイワというのは本当の名前じゃないよとたしなめられましてね、びっくりしています。ペリーが残していった言葉があるんですね。そういうふうに国際的な文化の交流というのは結構あります。

### 聞き手 1

沖縄というのは、ある意味ではそういう非常に文化の交流の激しいところだったということですね。

### 宜保先生

そういう言い方、たまり場みたいなものでしょうね。

## 10. 中国貿易とその影響

聞き手1

けども、先生、どうなんですかね、中国との行き来というのは非常に多かったわけでしょう。

宜保先生

はい。

聞き手1

大体数百年前からですね。特に尚家の関係というのは。

宜保先生

文献的には、昔は平仮名が入っています。古いのはですよ。これはやっぱり大和との交流が結構あって、そしてお坊さんたちが沖縄に来て、沖縄の表現は、やはり日本語の地方語ですから、平仮名で表記が楽なんだろうね、漢字じゃなくて。だけれども、今度は支配体制が中国をモデルにしてやっていきますと、今度は漢字の表記が多くなっていくんですね。だから、沖縄の古い石碑は、表に平仮名があって、裏側の方に漢字がある。それが逆転しましてね、今度は表に漢字が出て、裏側の方に平仮名という形に変わってきますよ。

聞き手1

それはいつごろなんですか。

宜保先生

漢字に変わったのは500年ほど前からでしょうね。平仮名はその前からあるようです。

聞き手1

平仮名なんですか。

宜保先生

『おもろさうし』なんかそうですからね。何分日本語ですから、沖縄の言葉も。平仮名で音で写すのが楽なんですよ。

聞き手1

最初は平仮名で来たということ、それから漢字が入り出したということですね。

宜保先生

古文献はおそらく平仮名だったろうと言われていたんですね。

聞き手1

そうすると、その行き来というのは相当激しかったものだと私どもは見ておるんですけども、やっぱりその文化の影響も非常に大きなものがあったわけですね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

宜保先生

もうおもしろ、いわゆる首里王府の初期のころ、第1尚氏、第2尚氏の初期のころは、東南アジアをまたにかけて貿易をしていますからね。そのときに、じゃあどの言葉を使って貿易したかという、この久米村とって華僑の村があるでしょう、そこではやっぱり中国語を使っているわけですから、この連中が通訳となってアンナンとかインドネシアへ行っ、向こうの華僑と貿易をするわけですね、沖縄の言葉は通じませんから。だから、そういうふうにして、この中国の言葉を久米村が使うことによって、今度は沖縄の海外貿易は中国語を使って広まったというふうなことが言われていますよね。

聞き手1

ああ、そうですか。久米村というのは、今でもそういう歴史的なものは残っておるんですか。

宜保先生

はい、もう人たちが全部自分の家譜といいますが、系図を持っていて、自分たちはどれの子孫だと。そして中国の何という村に自分たちの種族がいるということは大体ははっきりしていますよ。

聞き手1

そうですか。よくそういうものは残しておられるんですね。

宜保先生

ええ、もうこれは、あの人たちにすれば一つのステータスの確証ですから、命と同じように大切にしているんですね。結局、その昔、久米村が入ったころからは中国語を中心とした貿易が中心ですから、久米村がずっとリードしていったわけですが、大和の支配が入ってくると、今度は久米村じゃなくて、首里の方に大和文化が入ってきて、薩摩が直接やりますから、首里の方は全部日本語を使う人たちが多くなるんですね。ですから、玉城朝薫とか、そういう久米踊りをつくった人たちは、今度は薩摩とか江戸へ行くときの通訳ですよ。

中国に行くときはこの久米村の人たちが、蔡温とか程順則といまして漢学者がいますけれども、この人たちはまたずっと中国に留学して中国語が達者だったわけですね。ですから、新井白石と会った程順則なんかは現場仕込みの中国語ですから、新井白石と筆談をしながら、新井白石は、想像らしいんだけど、これは何と中国語では発音しているかというのを全部程順則から教わったと。

聞き手1

そうしますと、ある集落といいますが、地域でそれぞれの文化を持った人がおられて、そして、もともとからおられた方と、非常に表現がいいか悪いかわかりませんが、一つの集合体できたということですね。そうすると、そこで一つの文化が、またいろんな文化が発達したという。そういう点では非常に幅の広い文化というふうな見方をした方がいいわけですかね。

宜保先生

そうですね。ですから、基本的には沖縄の人は人種差別がないですよ。大昔から、那覇港には黒人も白人も、5~600年からおりますからね。しかも、韓国も中国も、この人たちはすばらしい文化を持ち込んでくる人だったんですよ。だから、尊敬こそすれ、差別はしていません。

聞き手1

それは大したもんですね。

宜保先生

ですから、沖縄では中国の人のことをトウノチュと言いますがね。唐の人。もうトウノチュと言って非常に尊敬するんですよ。どんな商人であっても。それから、皆さんのような人はヤマトンチュと言いましてね、大和時代から沖縄ははっきりと交流したんでしょうね。だからヤマトンチュというふうな形で言いますが、我々から言いますと、ヤマトンチュからはいじめられた歴史はありますけれども、大切にされておらないんですがね。

中国では、持っていった品物の倍返すんです、貿易。はっきり言うんですよ。ここから10持っていくと、向こうからお返しは20あるもんですから、首里王府は、薩摩が支配する以前は税金を取らないんですよ。どうぞ志だけ持ってこいと。首里王府は中国貿易でもう十分生活できるわけですね。だから、薩摩の支配体制になると、農民一人ひとりから税を取っていくもんですから、大変厳しいことになったわけですね。

聞き手1

あれは全国的な一つの体制ですね、あのころの形の。やっぱり中国との関係というのは、もう昔からの一つのパターンになってきたと。

宜保先生

沖縄には、中国のそういうふうな芸能文化とか、例えば航海術とか造船の技術とか、それから城をつくるとか、橋をつくるような技術が入っていますね、文明が。韓国からは綱引きとか闘牛とか、あるいは相撲ですね、ああいう民間レベルの文化が入ってきていますよね。

聞き手1

なるほどね。そう言われてみればそうですね。

宜保先生

そっくりですもん。また大和の方からは大和の方で、古来からずっと文化的なものが来ておりますからね。

## 11. 三線と太鼓

### 聞き手1

そうすると、中国から入ってきた文化の中では、もちろん漢字文化もそうですし、いろんなものがそうですけれども、芸術的には何があるんでしょうかね。

### 宜保先生

三味線でしょうね。中国では、三味線はリード楽器じゃないんですよ。中国ではリード楽器は胡弓ですよ。三味線は単なるリズム楽器なんですけれども、沖縄に来ると、もうこれが見事にリード楽器になりまして、リズムとメロディーを兼ね備えたものとして発達するわけですね。この三味線文化が一番日本文化に沖縄から与えた大きなものでしょうね。

### 聞き手1

なるほどですね、これはもう大きいですね。

### 宜保先生

我々も沖縄の芸能を見るとき、三味線が入っていると、これは新しいでしょうというと、地元の人たちは、どうしてわかるのかと。いや三味線が入っている。三味線が入る前は太鼓とかドラをたたいたんだろうと。

実は三味線を入れるか入れんのかで、昭和の初めごろからしょっちゅうお互い同士けんかがあったけれども、いつの間にか負けて三味線が入るようになった。もとはこれは三味線は入らなかったというふうなのがわかるわけですよ。だから、三味線が入るといのは、沖縄でも相当ハイカラな文化ですね。地方の輪踊りなんかも、三味線じゃなくて太鼓だけでずうっといきますから。

### 聞き手1

太鼓というのはずうっと昔からやっておったんですか。

### 宜保先生

あれは古いでしょう。

### 聞き手1

そうすると、この今の、ちょうど見ていただきます、これもかねと太鼓なんですね。

宜保先生

そうですね、三味線は入っていないでしょう。じゃんがら。

聞き手1

じゃんがらですね。あれも全然三味線はないんですよ。もうかねと、かねというのも、実は私が思うには、あれはやっぱり中国から渡ってきたもので。

宜保先生

それはもう鉦鼓と言いますからね、本土の方も。

聞き手1

向こうからでしょうね、これ。

宜保先生

だから、沖縄の場合、こういう仏具類はどうも大和です。年号が全部入っています、大和のものに。鱈口とか鉦吾とか銅鑼みたいなものは、全部大和から入ってきていますよ。

聞き手1

太鼓もそうですか。

宜保先生

太鼓は古いです。

聞き手1

太鼓は古いですね。特に小さなこういう鼓ですね。

宜保先生

しかし、これも中国から入っておったのも有史以前の問題で、やっぱり大和の方も昔から、鼓というのは古代人も持っていた可能性はありますよね。

聞き手1

そして、特に宮廷音楽なんていうのは完全に中国から来ておりますのでね。

宜保先生

沖縄の場合も島寄せる鼓と言いますがけれども、合図なんですね。太鼓をたたくと人が集まってくるとか、この太鼓によって火事があるとか、そういうふうな、人々に物事を知らせる太鼓、島寄せる鼓と言いますからね。

聞き手1

どんな字を書くんですか。

宜保先生

島といって島のこと。沖縄の場合は島というのは村のことなんです、集落のことね。だから、集落の人たちを寄せる、集めるとか、あるいは行事があるということを知らせるとか言いますね。

聞き手1

それは昔からあったんですか。

宜保先生

おもしろにもそれがうんと出てきます。

聞き手1

ああ、そうですか。いや、これは妙な私事になりますけれども、自分の生まれたところでは、今おっしゃったような村の人を集めるなんていうことは、葬式ぶりの太鼓とかがありましたよね、あのころには。太鼓が鳴ると、これから葬式が始まりますよといって人を集めるというあれですね。

宜保先生

先生、あのね、文京図書へ行きますと、外間守善のおもしろ解釈というおもしろの本(『おもしろさうし』上・下, 岩波文庫, 2000)がありましてね、安いんですよ、文庫本ですから。あれは全訳されています。そして上の方にいろいろ注釈がありましてね、その中に獅子舞とか鼓とか、そういう芸能に関する古い資料がたっぷりありますから、そう高い値段じゃない。2つで1,500円ぐらいじゃないですかね。私もこの間買ったんですけどね。

聞き手2

上下あるわけですか。

宜保先生

はい、上下で、黄色い岩波文庫本の大きさです。

聞き手2

じゃあ探しておきます。

宜保先生

田園書房とか。この間は私、パレットくもじの7階、もとの球陽堂か、そこで買いましたけどね。文教図書で買ったけども。あれにはたっぷり沖縄のそういう芸能の踊りとかそれがありますから、楽しみですよ。

## 12. 現在のエイサーについて

### 聞き手2

それと先生、こんな話を聞いたんですが、この前、平敷屋へ行きましたら、その平敷屋のエイサーと、それと隣の屋慶名のエイサーと何か違うとか。そして、そのルーツも違うとか言っておったんですが。山原あたりに近いとか。

### 宜保先生

屋慶名か平敷屋は名護から習ったと言っていますね。

### 聞き手2

名護の。要するに、そうして今の平敷屋のが名護の方に吸収されつつあるということで心配しておるんです。

### 宜保先生

いや、名護のは輪踊りでただ単純なんですよ。エイサーエイサー、ただこれだけだから。しかし、この太鼓踊りはおもしろいでしょう。だから、平敷屋でうんと、このもともとの平敷屋はお金もあるから、手踊りを全部太鼓に変えたわけですよ。太鼓に変えたから、おもしろいから、今後は逆に山原にどんどん行くんですよ、おもしろい芸能が。

### 聞き手2

そして、山原から屋慶名に来て、そして。

### 宜保先生

いや、昔は屋慶名に来たって、簡単な念仏踊りが。そして屋慶名がうんとおもしろくして、この山原が習っているわけですよ。一遍が行ったのが、もう一回またおもしろくなったんで。

### 聞き手2

ちょうど僕の友達がいるんですが、今のエイサーの保存会がありますよね。そこの会長をしている人なんですが、宮城という。この人の話だと、何か屋慶名と違うと。そして、何かこちらは平敷屋は久米村あたりから来たんじゃないか。

### 宜保先生

久米村じゃないですよ、今のこの辺から広まって。あれ、ヤードに種族が持っていくんですよ。お盆の行事として、エイサーはね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続)12. 現在のエイサーについて

聞き手1

そして、向こうは名護から来た。屋慶名は名護から来たし。

宜保先生

特例でしょうね、そういうのはね。

聞き手2

そして、今ね、実は向こうの方がおもしろくなっているらしいんですよ。

宜保先生

名護の方が。

聞き手2

はい。要するに屋慶名の方が。それでね、平敷屋の方がそれを取り入れつつあると、その青年あたりがね。それで、あらあらって今びっくりしているような感じの話をしていました。

宜保先生

そうそう。芸能はおもしろいところに勝てませんから、派手なところに。そういうことがありますね。

聞き手2

やっぱり平敷屋は、結局、保存会というのはずっとそのまま伝統を守ろうやと。青年エイサーがありますよね、青年はもう新しいのをどんどん取り入れているという。それでね、なかなか折り合いがつかないらしいんですよ。

聞き手1

先生、勝連はどうなんですか。

聞き手2

勝連はどうなんですかね。

宜保先生

いや、みんなあれですよ、あの中部はみんな、戦後まで太鼓は1つか2つぐらいしか使わないんですよ。それが、もう戦後は太鼓が安く手に入るもんだからみんなが持つようになって、ああいうドンドコドンドコ太鼓を打ち飛ばすようになったんですよ。もとは簡単な踊りですよ。

しかし、エイサー大会があったでしょう。あれがもう点数でどんどん評価していったもんだから、派手なものにどんどん変わっていったんですよ。一挙に変わりましたね。私、あの審査委員を5年ぐらいやりましたがね。もうとにかく派手なものが勝ちますから。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

## (続)12. 現在のエイサーについて

### 聞き手2

私のところは、恩納村の山田というところなんです。その山田のエイサーは大太鼓1つですよ。それから、しめ太鼓が4~5個あって、あとは全部踊りなんです。そういったので戦前からそういうことでした。

### 宜保先生

もう戦前は太鼓1つあればよかったんです。ドンドコドンドコたたいて、三味線弾いてね。それが、安くなるとトイカゴが3つも10も入って行って、みんなで持つようになるんですよ。先生、そんなところで。

### 聞き手1

ありがとうございました。